

# 岡田節人の歴史放談② 黄昏のウィーンの生物学 Paul Kammerer

けて昆虫類での異型再生の研究は、今日的関心を惹くものである。触覚に脚が生えてくるような、マクロな形態形成の異常を生ずる遺伝的変異が、現在の生物学にどのような大きな意義をもっているかは、周知の通りであるが、それに先がけて、まったく同じ現象が非遺伝的な再生において起こる例を彼は次々と発表していた(注1)。また、生物についての理論的関心も強く、「成長の数学原理」などという本も書いている。人格的には大いに高い人望を集め、また毎夕オペラや音楽会に現れ、典型的な中欧的エリート文化人であったらしい。こうした、所長プシブラムの意図によって、美への陶醉のなかにある世紀転換期の、崩壊の近い大帝国の首都ウィーンの、それもよりによってその象徴的な場所に、前衛的科学の研究センターが設置されたのであった。

その研究所の創設直後に、とんでもない才能と、男性としての魅力にみちみちた21歳の青年が現れた。その名はパウル・カンメラー(以後はKと略記)。

ウィーンのかなり裕福な(貴族でないし、またユダヤ人でもない)音楽狂の一家に生まれたこの青年は、ウィーン・アカデミーで音楽を学び、歌曲を作曲していた。大指揮者ブルーノ・ワルターとは友人仲間であり、偉大なグスタフ・マーラーとも付き合いがあった。その後で動物学の勉強を始めたのであったが、当時のウィーンの大学で学ぶことのできる古色蒼然とした伝統的な動物学にあき足らず、新しい実験生物学研究所に血湧き肉躍らせる魅力を感じたのであった。若くからウィーンの文化的エリートの社交界にあったKは、それを楽しみつつ、科学という新しい世界へ入ったことであろう。

Kは主として両生類(カエルやサンショウウオ)を用いて生殖と遺伝に関連する数多くの実験を行なった。とくに、環境条件の人工的变化の影響を広汎に調べ、数多くの長大な論文を発表した。

そして彼は、獲得された生物の形質は遺伝する、ということを実験的に証明し得たと主張した。すでにメンデルの遺伝法則は完全に確立された時代であったが、今日できえ心情的期待を寄せる人がないでもない獲得形質の遺伝の事実を証明した、というのであるから、科学のコミュニティを超えて注目を受けたことは驚くにあたらぬ(注2)。

一般的注目だけでなく、20世紀前半の実験生物学の分野では、バイブルに近い権威をもっていた「ルー(Roux)の発生学誌」には1910年~20年代にわたって莫大なページ数を占める彼の論文が印刷されていて、学術的にも多大の注目を得ていたことを語っている。

(次号へ続く)  
(おかだ・ときんど/JT生命誌研究館館長)

(注1) 季刊『生命誌』通巻3号(1993)には、ナナフシムシの異型再生の紹介がある。

(注2) 1971年になってから、『真昼の暗黒』などの著作で高名なケストラが『サンバガエルの謎』と題したノンフィクション小説(?)を書いた。ここではKは権威と陰謀に消された人物として同情的立場で記されている。日本語にも翻訳され(石田敏子訳,サイマル出版会,1975),訳書出版当時はかなりの読者があったらしい。アメリカのある大手書店は、この書をどのカテゴリーに入れてよいかかわからず、殺人ミステリーの書架においた、ということだ。

※このページに掲載した写真・図版の著作権所有者をご存知の方は、編集部までお知らせください。



Prater Avenue, Vienna by Maximilian LENZ (1860-1948), Historisches Museum der Stadt, Vienna, Austria/ Bridgeman Art Library/ オリオンプレス

プラーター公園は、1873年、ウィーン万国博の会場として整備され、今もウィーン観光の一大名所である。かの古典的名画『第三の男』で有名になった大観覧車はこの公園内にある。ウィーンの人々にとっても、そこがどれほど心くすぐる場所であるかは、R.シュトラウスの楽劇『ばらの騎士』を聴けばよい。第一幕のクライマックスで、元師夫人マルシャリンは、前夜に不倫を共にした少年オクタヴィアンに、午後のプラーター公園での再びの逢瀬を、耽美を極めた音楽にのせてとりつける。

そのプラーター公園の一隅にあった自然動物館が営業不振で倒産に至ったとき、豊かな個人的資力に恵まれた、チェコ生まれのユダヤ人動物学者プシブラム(Hanz Leo Prizbram)は、これを私費で購入し、当時の一般の大学では教えることも研究することもほとんどなかった生物学の先端分野の研究センターを、ここに開設しようとした(1903年)。

新しい研究所は「実験生物学研究所」と称され、当時の伝統的生物学(動物学や植物学)にない前衛的研究をもくろんだ。“ばらの騎士”のかぐわしさに包まれ爛熟した文化の場に、このような研究所が作られたのであって、初めからことは波瀾づくみである。

プシブラム自身の実験研究の関心は、再生であって、とりわ

左/「音楽的才能の獲得性遺伝について」というカンメラーの著書の表紙。発表年号もわからず、内容不詳。しかし、カンメラーならではのタイトルではある。『ウィーン 芸術と社会 1890-1920』ヴァイゼンベルガー編、岩波書店より) 右/中部ヨーロッパ産の2種類のサンショウウオ(salamandra)を用いて、環境による体色・斑紋の変化とその遺伝性を調べた論文に付されている図版のうちの一枚。 Arch. Eutwicklungsmechanik, 25巻(1908)。 下/パウル・カンメラー(1924年, 44歳) 『サンバガエルの謎』ケストラ一著, 石田敏子訳, サイマル出版会, 1975より転載)

